



与謝野晶子における表現活動の変遷：  
短歌から評論活動への移行過程(一九九八年度第一回  
コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 香内, 信子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004977">https://doi.org/10.24729/00004977</a>

## 与謝野晶子における表現活動の変遷

### ——短歌から評論活動への移行過程

香内 信子

#### 一 はじめに

晶子がなぜ「評論」を書くようになったのか、という主題は、今まで余り問題にされていない。いわゆる「母性保護論争」などのあった大正期に入ると「女性解放」の視点、その他の問題から人々の耳目を集めている。しかし、ここで問題にしようとしている第一次『明星』の廃刊以降から欧州旅行期まで、年代でいうと一九〇八年～一九一二年は、晶子の「思想」形成にとって重要な位置をしめる時期である。

本稿では、一九〇四年～一九〇五年、晶子自身の創作上の転換——短歌の変化に触れながら、徐々に、散文の世界（小説、脚本、童話）へと入り、さらに「評論」の世界に入ってゆく過程を点描してみたいと思う。従来、ともすれば、与謝野夫妻、特に寛の人間関係、恋愛の三角関係、人間模様にだけしぼって問題にされる傾向があった。人間の生活は、もっといろいろな側面を含みながら展開されるものである。このもっとも、当然のことを軸に、時代、各メディアとの関連の中で、執筆の輪を拡げてゆき、新しい視点の獲得に苦闘を続けた推移をたどってみたいと思う。

## 二「女のうた」からの脱出

一九〇四年(明・37)～一九〇五年(明・38)は、晶子、二六歳～二七歳に当る。一九〇四年九月には、言うまでもなく『明星』誌上、「君死にたまふこと勿れ」が発表された年である。この詩の表現上の問題とも関連して思うのが、この年、一言で言えば、晶子の表現上、創作上の一つの転換期であったのである。いわゆる評論活動は、まだはじまっていないが、歌集は『みだれ髪』(明治34・7)、『小扇』(明治37・1)、『毒草』(寛と共著—明治37・5)三冊を出版していた。この三年間に、子供も二人になっていた。晶子の精神的変化がいかにようになって行ったのか。なぜ、一つの「転換期」と言い得るのか。それは、晶子自身に語ってもらふことからはじめたいと思う。晶子は、『女子文壇』のインタビューに答えて以下のように語っている。

「……去年の春頃から私の歌の風が變つたとお云ひになるのですか、變つたのですとも、一、昨、年、の、夏、から、で、御座いますよ、私はそれまで片時でも自分は女であると云ふことを忘れた事が無いので御座いました。萬葉に無名の作者が幾人あつたか知りませず、また和泉式部や式子内親王や俊成の女など云ふ天才の人はあつても、まだ女の歌ふ事が澤山残つて居ることをしりまして、それをすてるのがいかにも惜く、また女が努力しなければとても歌の上に男と歩むことが出来なからふと思ひますものですから、何でも其時代『一、昨、年、の、夏、ま、で』には女の歌を作らふ作らふと思ふて居りました。——中略——話が前にかへりますが、その後は私はもう人様並に男の中へ出てよい閱歴が出来たかも知れないと存じまして、一、昨、年、の、夏、ご、ろ、から、は、自、分、を、男、と、も、女、と、も、少、し、も、思、は、ず、に、歌、を、作、つ、て、居、る、の、で、御、座、い、ま、す。それからは女の歌を作る時にもひろびろとしたことが歌へるやうな心持がいたします。——中略——そして『毒草』に集めましたのが女として歌を詠みました最終なのでございます。」(「をんなの歌」、明治40年1月)〔傍点

## 引用者]

傍点部分に見られる「一昨年の夏」とは、明治三七年の夏のことである。女としての歌は、『毒草』が最終と、はつきりと語っている。晶子は翌年にも、同主旨のことを語っている。少しくどいようだが、大事なことなので引用しておく。

「……『毒草』までの私の歌は、一圖に女子の特色をと、そればかりで作つてをりました。その後は又、兎も角も是れだけ努力して來た上は、既もう女子という立場のみでなくとも宜よからうと思ひ、男になつたり女になつたりして詠んでをります。

元朝マタや長安に似る大道に遣羽子やりはこしたる袖とらへけり

これなどを女こんなことが這麼事をといふ非難も受けましたが、私の心では其の時の男の心持になつて詠んでをるのです。」(「女詩人の神興―男の心持になつて詠む」、『女學世界』、明治41年8月)

以上、二つの文章を引用したが、全く同主旨の内容である。男と女という対置図が少し気になるが、要するにそれまでの社会常識としての作られた「女」の呪縛からの、創作上の解放であつたと言つてもよいと思う。実体として「女であること」には相違ないが、それが一つの垣根を越えて一歩前進して「人間」へのびてゆくには、あと数年を要したと考えられる。それは、晶子が、短歌の世界のみにとじこもつていないで、広く、社会への目がひらけ、「評論」などの活動へ執筆の輪をひろげてゆくのと対応する。それと「新詩社」の活動、特に、新らしい考え方もつた多くの異性が出入し接触する中で、自然に淘汰されてゆく環境があつたことも忘れてはならないであろう。晶子は次のように書いている。

「わたしは平生殆ど女であると云ふ事を忘れて居る。良人や他の先輩友人の男の方と話して居る時の心持を云へば、男女の性を超越して齊しく、『人』として交際して居る様に思はれる。其れが女の知合の方と話す場合には、妙に相手も自分も女であると云ふ事に気が附いて何だか打解けにくい所がある。此心理は何う云ふ訳であらう。わたし一人の心持であらうか。それとも男の交友の多かつた清少納言や一葉女史などにも共通した心持では無かつたか。」(「雑記帳—私の讀物と交友」『女學世界』、明治44年7月)〔傍点引用者〕

のちに、新詩社メンバーの一人茅野蕭々が「晶子さんと話してゐると、性といふことを忘れることが出来た」と回想しているが、一つの例証と言ってよいのではないか。

### 三 『明星』誌上の変化

一九〇四年(明治・37)当時、まだ、晶子の主要な発表場所は『明星』であつた。では前述した晶子の創作上の変化が、『明星』誌上、どう変化したのか、を少し具体的に述べておきたいと思う。「君死にたまふこと勿れ」もまた、その流れの中で生まれたものであつた。

さきに引用した晶子の文章、つまり『毒草』までとは、同年の五月以前のものを指す。実際『明星』を調べてみると、全くそのとおりであることがわかる。「女のうた」の代表として、山川登美子の歌、二首を引用している。晶子が「前の時代の最終の代表」とする歌は次のようなものである。

友染の袖十あまり圓まろうより千鳥ちどりきく夜を雪ふり出でぬ

なほ戀ふとやのろひの弓の弦に長き琴の緒だきてまどへるのみぞ

野をおもひ牧場をおもひやはらかき羊に似たる眼おもふとありね

「京の袖」(明治37・1)と題した三一首の中の三首である。この年の前半には、このほか、四月号「挽歌」(八首)、六月号「夏の袖」(五首)、計四四首と晶子にしては少い。(次男、秀の出産はあったが。)後半には、九月号の「君死にたまふこと勿れ」に関連した「ひらきぶみ」(十一月号)があり、短歌では八月号の「みづあふひ」(四三首)が晶子のいう新しい、意識変革後の視点から歌ったものである。

では翌年の一九〇五年(明・38)はどうであったか。一月号「春の夜」(三〇首)、四月号「春月集」(五八首)、五月号「ゆく春」(四五首)、六月号「はなたちばな」(五二首)、九月号「舞ごろも」(三五首)、十一月号「新詩社詠草 その一」(九一首)、十二月号「新詩社詠草 その二」(一〇〇首)と一年間で四一首も掲載されている。創作のエネルギーが噴出したと言うべきか。

晶子が、人からの質問に答えた歌も含めて、「前期の終わった後の歌」としてあげている歌には次のようなものがある。

元日や長安に似る大道に遣羽子したる袖とらへけり

うたたねの夢路に人の逢ひにこし連歩のあとを思ふ雨かな (歌集『舞姫』冒頭の歌)

おそろしき戀ざめごころ何を見るわが眼とらへむ牢舎ひとやは無きや (歌集『夢の華』冒頭の歌)

また、「教科書」に載ったり、多くの人にいまなお愛唱されている歌には次のようなものがある。「ひろびろとしたことが歌へるような心持」がしていたという気持がわかるような気がする。

海戀し潮の遠鳴りかぞへつつ少女となりし父母の家（「みづあふひ」明治37年8月）

鎌倉や銅かねにはあれど御佛は美男におはす夏木立かな（同右。のち「御佛なれど釈迦牟尼は」と変更する）

今日みちて今日やぶれては今日死なむ明日よ昨日よわが好ぬ名（同右）

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に（「春の夜」明治38年1月）

たたかひは見じと目とづる白塔に西日しぐれぬ人死ぬ夕（「舞ころも」明治38年9月）

さて、では、晶子の心の変化をきたしたのには、いろいろの要因があると思われるが、私はこの過程を調査していて、一つの発見があった。一つの要因として、一九〇四年六月号の「夏の袖」にあったのではないかと推定する。同号『明星』の表紙をめくると、頁の最後に「『夏の袖』（短歌）登美子、まさ子、花子、信子、晶子等」となっている。本頁をみると紙質が変わりピンク色になる。「白百合、しら梅、白すみれ、しら桃、しら萩」となっている。言わずもがな、寛のつけた雅号である。「白百合の君」と言えば山川登美子を指し、「しら梅の君」と言えば増田雅子を指していた。晶子は「しら萩」であった。この本文をみたとき、『明星』の常套手段であったとは言え、少しいやな感じがした。この時期、なぜこうした雅号を並べて編集したのであるうか。寛のなにげないいたずら心から出たものであるうか。晶子はこれを見て、おそらく不快感を持ったのではないだろうか。いわゆる「女の歌」の勢ぞろいである。晶子の「女の歌」からの離脱は、こうしたささやかなことからあったのではないかと推定したのである。

#### 四 各紙誌への選歌

晶子の新しい活動の場として、各紙の選歌をはじめたのは一九〇五年からであった。このことは与謝

野家の敗政収益に役立つただけではなく、いままでの『明星』誌上という限られたメンバーを相手とする同人誌とは違い、くらべものにならない多数の人びとに、晶子流の歌が影響を及ぼすことにもなる。

一番早いのは『萬朝報』（一九〇五年十月から）、『都新聞』（一九〇六年一月から）、『東京二六新報』（一九〇六年四月から、これは佐々木信綱との交替選者）、この選歌活動と並行して、各紙に自分の短歌を発表しつづけている。ちなみに夫寛が鉄幹名を廃したのがこの年であった。『明星』誌上では、一九〇五年（明・38）四月号までは鉄幹記名であるが、五月号よりは寛記名となっている。このことは、一般的にはすぐに浸透しなかったらしく「餘白を借りて云ふ。鉄幹と云ふ雅号は[小生]に於て、一昨年来如何なる場合にも用ゐざるものなり。猶この後も用ゐること無かるべし。[小生]が雅号を廃したことを知らざる諸君に、この由を告ぐ。」（与謝野生、『明星』明治39年11月）と、わざわざもう一度ことわっている。前年に、なぜ廃号したかについては記述がない。一九〇五・六年は、晶子にとっても寛にとっても、いろいろな意味で一つの転換期であったのである。二年後の十一月に『明星』は廃刊になる。

では、『萬朝報』の「讀者文藝懸賞募集、新派和歌」の選歌の内容はどうだったのか。選歌は毎週一回である。一等と付記されている歌と晶子の歌を十月分だけ参考のために列記する。

十月十日、応募総数八二一首、選歌は八首、一首のみ一等と付されている。

神無月霜ふる町の門川や小菊枯れたる妹の家かな（百瀬柴垣、信濃）

君まさぬ端居やあまり數おほき星に夜寒をおほえけるかな（晶子）

十月十七日、応募総数八八一首。

月の夜の銀河草野を流れ来る音とし聴きぬ初秋の風（倉橋緑竹、大和）  
大赤城北上つ毛の中空に聳そびやく肩を秋の風吹く（晶子）

十月二十六日、応募総数八九五首。

山百合の花こそ掩へ眞言の聖が打ちし岩に湧く水（杉浦桃崖、三河）  
おん船はかまに居こぞる人の袴はかまより赤き紅葉の鳥さしさして来ぬ（晶子）

以上みてもわかるように、応募する人びとは、これだけ見ても信濃、大和、三河と規模は拡がっていた。大体一回の選歌は八首、多い時で一〇首どまりである。応募者の約一〇〇分の一で確率は比較的高い。晶子の歌風は、たしかに違っている。この歌は、『明星』にも再録されている。

『萬朝報』は黒岩涙香が主宰する新聞で、一八九二年（明・25）十一月一日創刊し一九四〇年（昭・15）十月一日廃刊。タイトルは「よろず重宝」をなぞった、いささか、ふざけたような名をもとにしている。主として上流階級の人たちに狙いを定めセンサーショナルなスキャンダルの暴露記事を掲載したことは有名である。上流階級は自分たちが作って民衆に押しつけた「教育勅語」に違反しているのではないかと、と言うのが、戦術もあるうが黒岩の論理で、別様に言えば或る種の方向性を持っていた新聞と言ってもよい。黒岩と晶子の関係はよくわからないが、晶子はこの選歌の仕事に力を入れていたと思う。選者の短歌は一首ということもあつてか、他の紙誌に比して、若干おもむきが違う短歌が顔を出してくる。

おそろしき戦の神のにへだなに秀才すさいの君をのせてけるかな（故沖氏の父君がもとに、明治39年6月23日）  
 生きてまた歸らじとするわが車刑場に似る病院の門（明治44年3月4日）  
 生れたる日のごと死ぬる日の如く今日を思ひてわれ旅に行く（欧州旅行の前日、明治45年5月4日）

この選者の仕事は、欧州旅行後もひきつづきなされ、昭和の時代までの長きにおよんだ。有名な次の歌も『萬朝報』が初出である。

却初より造りいとなむ殿堂にわれも黄金の釘一つ打つ（大正11年1月21日）

なお、短歌以外では小説「不覺」（三〇回連載、明治42年8月10日～9月19日）がある。

では、『東京二六新聞』の方はどうであろうか。（『二六新報』は、明治三七年四月十五日より『東京二六新聞』と改題し、明治四二年十二月一日にまた『二六新報』に復した。）通称『二六新報』として通されてる。

『二六新報』は、かつて夫寛も在社していたことがあり、有名な「亡国の音——現代の非丈夫的和歌を罵る（一）（八）」（明治27年5月10日～5月18日）を書いた新聞である。落合直文の弟槐園と共に和歌の選者にもなったりしていた。この年の寛年譜には「歌論、「亡国の音」を「二六」紙上に連載し、宮内省系の歌を非難す。七月日清戦争起り、詩歌を以て国民士気の鼓舞に力む」と記されている。晶子も別な意味で一九〇八年（明・41）から毎年一月に行なわれる「宮中御歌会始」に批判の矢をむけはじめる。この件については、かつて私は「『御歌会始』批判」と一節をもうけて紹介したことがあるので（『与謝野晶子——

昭和期を中心に』ドメス出版、一九九三年十月)、ここでは繰り返さないが、いわゆる旧派に対して新派和歌からの批判であった。一九〇八年「新年御題、社頭松詠進歌に就いて」(二月二十日〜二十九日)、一九〇九年「新年御題 雪中松詠進歌評」(一月十九日〜二十七日)、一九一〇年「詠進和歌 新年雪を評す」(二月二十日〜二十七日)、と三年間に亘っている。かなり強い語調で激しく批判したこの歌評は、単なる歌評を越えて、大宮人―権威主義に対する一つの反抗の意を現わしている。

この『東京二六新聞』には、「時代文藝」という欄が設けられており、寛、茅野蕭々、白秋らも執筆していた。この欄に短歌でもない、歌評でもない、エッセイ風社会時評を書き出したのは、一九〇九年からであった。晶子の社会時評―評論の書きはじめと言ってよい。「産屋物語」(一九〇九年三月十四日〜十九日)、「離婚について」(同年四月八日〜十一日)、「雑感」(同年七月三十日〜八月四日)などである。これらは第一評論集『一隅より』に収録された。「産屋物語」は本の冒頭におかれている。いろいろな意味で今でもよく引用されたり、論の対象にされたりしている。

「雛の節句の晩に男の子を譽げて未だ産屋に籠つて居る私は医師から筆執る事も物を讀む事も許されて居りません。所で平生忙しく暮して居りますので、斯う静かに臥つて居りますと何だか獨りで旅へ出て呑気に温泉にでも入つて居る様な気が致しますし、又平生考へもせぬ事が色色と胸に浮かびます。お医者には内所で少し許書きつけて見ませう。」

ではじまるこの一文は、男性にはわからない産の苦痛、女性が人間を産むことの大役は、世のほかの社会的事項を越えるものである、と書きながら、すぐさま、それなのに「男の方の手で作られた經文や、道徳や、國法では、罪障の深い者の如く、劣者弱者の如くに取り扱はれて居るのは何う云ふ物でせう。」と女性の立場から切り返しをはじめている。晶子独自の文章表現――いわゆる起承転結型ではない、自由に思

いつくままに書き込むやり方は、以来、晶子文章の特長となってゆく。

それと、書き出しにみられるように、この「産屋物語」は三男麟の出産のときであった。子供は五人目となる。晶子は何か特別の出来事があったときなどで感じたことを、すぐに書きとめておく習慣を、この頃から持ちはじめたようである。たとえば、次男秀の誕生の時は「産屋日記」(明治36年6月22日、28日の記録)として、三年後の『明星』(明治39年7月)に掲載されているが、この方は「美文」として扱われている。文体がぜんぜん違っている。内容も、誰それが見舞に来たとか、産後の食物が堺の母のお産の時にくらべて、ッわびしいッとか身辺雑記が中心になっている。それが、この「産屋物語」になると六年間の時の差があるとは言え、他者意識、つまり、客観的な手法に変わっている。これは新らしい世界、ジャーナリズムとのかかわりをはじめたことを意味する。『明星』という、ある意味では狭い社会環境から、読者が個別に特定できない広い世界への巣立ちを意味する。

## 五 当時の晶子の生活

五人いったりははぐくみがたしかく言ひて肩のしこりの泣く夜となりぬ

歌ではこう歌った当時の晶子の生活は、毎日どうした風に過ごしていたのであろうか。日常の生活を、事細かく書き残すことの少なかった晶子が、珍しく、書いた一文があるので紹介しておきたい。この文章と、このあとに記す執筆過程とを照合してみると、当時から「天才」と言われていた晶子の、知られざる一面を知ることが出来るし、生活の苦闘の中での芸術上の表出が日常とどうかみ合い、かみ合わなかつ

たか、特に女性問題にかかわる論点が、しばしば晶子の「体験主義」と批判されている。しかし、表現された内容がすべて、生身の「体験」と接続して発想されているわけではない。もとより、書き手の日常の体験は、その存在の基礎をなすものであり、表現者における体験の重要性は、一般的には、基底にあることは言うまでもないが、すべての表現内容が、体験から出て来るわけではない。体験から一応切れた論理構成——「思想」も表現内容にあるわけである。それをすべて「体験」に還元するのは、悪い意味での疑似私小説主義である。

以上は、一般に言えることではあるが、晶子の場合も例外ではない。晶子の日常体験と社会・政治を見る論とは、明らかに区別して分析しなければならない。

さて、そうした事を頭に入れながら、晶子の日常の一部に触れてみたいと思う。この一文は、さきの「産屋物語」を書いたのと同時期のものであるので、興味ももてるし、リアリティがある。まず、五人の子供たちのことから。

「兄の方は来月から曉星小学に入ります。弟は六つで、下が二人これは双生児で御座います。乳母も置きませず里子にも遣はしませず二つの乳房を一つづ、分けて育てますのは、随分骨の折れたことで御座いました。丁度まる二つになります。夜分などは今度生まれました乳呑子と三人の世話で、唯今でも私の安眠する時間が三時間か二時間位なもので御座いませう。」（詩人の妻となつて五人の子を抱えし私の生活」、『東京毎日新聞』、明治42年4月4日）

と語っている。次に自分の一日の生活を珍しく細かく語っている。以下、少し長いが引用しておく。

「私は朝起きて顔を洗ひますと赤ん坊の湯たんぽを沸して、それから御飯を焚き、三人の子の牛乳を瓶に拵へます。お菜拵へをして、小供に着物を着更へさせまして自分の髪を結ひます。それから夫の起

きますまで洗濯を致します。食事の器具を自分で洗ひまして、それからのことは小さい下女にさせます。正午迄に一度買物に出ましてお晝後お湯にでも参ります事があると、もう日が暮れます。七時頃に双生児が寝ますと初めて自分の世界になつたやうで、読書も致します。筆もとります。併しそれほど忙しくもなく朝から歌を作るやうなことも三月に四・五日位は御座います。創作も新聞雑誌の方の仕事も一通り済しました月末などに、小供の着物を縫ふ時間が御座います時、この時が私には最も楽しみで御座います。併し一番楽しいと云ふのは夫や友人の方などと徹夜して歌を作る時で、これは身も世も忘れるやうで御座います。」

何の事はない。最後の部分をのぞけば、普通の家庭の女性なら誰でもがやっている日常である。しかし、晶子は、いかに日常生活をキッチンとやっているかを告白しているわけではない。なぜなら、この文章の前に「私は臺所の煮焚や、小供の養育などの事許りを、私の生活向であるとして考へたく御座いません。」と語っているからである。その上、当世の女学校で、家政科とか料理法などを専門の科目として教えていることの不合理性を、説いてもいる。人間は、その必要の生活に入れば誰でも、自然に出来るものだというとも言っているから、一つの例証として流れ上語ったのかも知れない。タイトルにもあるように晶子の生活の話はさらに続く。与謝野家では「夫婦共稼ぎ」をしていると語り、その生活はもう「四・五年も」続けているという。逆算すると、やはり明治三七・八年から晶子の個別の収入があったことを意味する。それは前述した「和歌選歌」の仕事をはじめた年と一致する。最後の部分で、最近上京して来た妹のさとが、新らしい羽織を着ていて、どうしたのかと聞いたたら、三越で眺えて仕立させたら三五円かかったという話しを聞いたので、私は二〇円でこれだけのものを買ったことを日記をみせて話したという。その日記を事細かく紹介している。これも珍しい話であるし、当時の晶子の金銭感覚と、物価指数の一つの

例示ともなり、意味もあると思うので、一覧表を提示しておきたい。

晶子、二〇円の買物内訳一覧

- 1 銘仙一反(夫のもの) 三円七〇銭
  - 2 銘仙一反(私のもの) 四円二八銭
  - 3 メリンス一丈八尺(七瀬、八峰のもの) 一円五〇銭
  - 4 メリンス一丈八尺(赤ん坊のもの) 八三銭
  - 5 裏地一反(夫のもの) 八五銭
- (以上、三越の見切場) 計一円一六銭
- 6 紅木綿一反(赤ん坊のもの) 五〇銭
  - 7 黄色木綿一反(赤ん坊のもの) 五〇銭
  - 8 黒縹子片側(私のもの) 一円一五銭
  - 9 ネル七尺 五八銭
  - 10 久留米緋一反(光と秀のもの) 二円五〇銭
  - 11 縞一反(秀の着物と蒲團の表) 一円一八銭
  - 12 緋金巾一反 六五銭
  - 13 アルミニウム鍋一個 五〇銭
- (以上、松屋にて) 計七円五二銭
- 14 胸當二つ 三〇銭

15 人形二つ 三〇銭

16 絵の具 一五銭

17 おもちゃ一つ 一五銭

(以上、神保町の一五銭均一店にて) 計九〇銭

18 菊の花 一一銭

19 原稿紙二〇〇枚 三三銭

合計二二円

(註) 金額は原文のまま。6〜13の松屋買物代金「計七円五二銭」とあるのは、七円五六銭の間違い。合計は二〇円五銭となる。

## 六 『明星』 廃刊後の執筆の拡がり

『明星』を廃刊したのは、一九〇八年(明・41)十一月であった。晶子の執筆の輪のひろがり、廃刊される前からはじまっていた。短歌以外のジャンルに手を染めたのは、前述した『萬朝報』や『都新聞』の新派和歌の選歌をはじめた頃と重なりあう。内容は、いわゆる評論風のものではなく、脚本、小説、童話などから入って行ったことである。一九〇六年(明・39)の例をあげれば、四月、「むかしの家」(小説、『新古文林』)、六月、「村雲」(小説、『新古文林』)、八月、「喜劇 夏の夢」(脚本、『太陽』)などである。この時期『明星』にも、短歌以外の「歌話」や藤村の「破戒その他」の書評、さらに美文と称する「産屋日記」(次男秀誕生記録)などを書いてはいるが、『明星』以外の雑誌にかなり多く、短歌も小文も書き出している。短歌以外に手を拡げていった理由は、収入を得るための生活の理由が大きいと思うが、それだけではなく、表現者としての視野が広がったこと、「女うたから」の脱出は、人間としての自立確立への移行過程の一つであったことを意味しよう。

ここでは、『明星』廃刊後、晶子が、どうした新聞・雑誌に、どうした内容のものを書き出して行ったかを、全部はとも無理なので、一九〇九年(明・42)〜一九二二年(明・45)の四年間の一月号のみを私のノート・メモから抽出して紹介しておきたいと思う。(前述した『萬朝報』、『都新聞』、『東京二六新報』、『二六新聞』の短歌はのぞく。)

一九〇九年(明・42) 三二歳

- 1 「綿帽子」(小説、『活動の友』)
- 2 「こけ子とこつ子」(童話、『少女の友』)
- 3 「新年御題、雪中松詠進歌評」(『東京二六新報』)
- 4 「男の胸」(福岡日日新聞)
- 5 「絃餘集」(五〇首、『スバル』)
- 6 「ゆづり葉」(一四首、『新聲』)
- 7 「椿」(一二首、『帝國文學』)
- 8 「ありのすさび」(一〇首、『趣味』)

一九一〇年(明・43) 三三歳

- 1 「驅落者」(脚本、『スバル』)
- 2 「三匹の犬日記」(童話、『少女の友』)
- 3 「詠進和歌 新年雪を評す」(『二六新聞』)
- 4 「文藝家相互評、大塚楠緒子女史」(『趣味』)

- 5 「十七、八の頃の悲しい思ひ」(『中學世界』)
  - 6 「三ヶ所の錢湯」(『婦人画報』)
  - 7 「アンケート、名流婦人の趣味と生活」(『女學世界』)
  - 8 「涓滴」(二〇首、『早稻田文學』)
  - 9 「金鳳華」(二五首、『女子文壇』)
  - 10 「日記より」(二五首、『帝國文學』)
- 一九二一年(明・44) 三三歳
- 1 「婦人と思想」(評論、『太陽』)
  - 2 「私の考へてゐる女子の自覺」(評論、『家庭』)
  - 3 「清少納言の事ども」(評論、『早稻田文學』)
  - 4 「雑記帳」(評論・隨筆、『女學世界』)
  - 5 「私の考へてゐる青春時代」(『女學世界』)
  - 6 「ある日の朝」(小説、『スバル』)
  - 7 「養子」(小説、『新小説』)
  - 8 「ひまな人」(小説、『女子文壇』)
  - 9 「黄色の土瓶 上」(童話、『少女の友』)
  - 10 「歌を詠む心得」(『學生文藝』)
  - 11 「歌會始選歌評」(『東京朝日新聞』)

- 一九二二年(明・45) 三四歳
- 1 「御門主」(小説、『東京朝日新聞』)
  - 2 「源氏關屋」(小説、『スバル』)
  - 3 「環の一年間」(童話、『少女の友』)
  - 4 「新年雜感」(『時事新報』)
  - 5 「自分の文学的生活」(『女子文壇』)
  - 6 「日記のうち」(『早稻田文學』)
  - 7 「箆笥のうち」(『婦人世界』)
  - 8 「良人への手紙」(『大阪朝日新聞』)
  - 9 「夢」(詩、『青鞥』)
  - 10 「わがおもひ」(一九首、『朱欒』)
  - 11 「そぞろごと」(三〇首、『新日本』)
  - 12 「わが春」(二〇首、『讀賣新聞』)
  - 13 歌集『青海波』有朋堂刊
  - 14 「春」(二〇首、『毎日電報』)
  - 15 歌集『春泥集』金尾文淵堂刊
  - 12 「花簪の箱」(『少女世界』)
  - 13 「草の下萌」(二五首、『早稻田文學』)

以上、各年の一月号のみ紹介した。厳密な意味でのモデルにはならないが、年々、執筆量が多くなつてゆくことがわかる。特に、評論活動でみるならば、一九一一年が、一つのピークをなしている。これらは、全部ではないが、評論はのちに記す『一隅より』に、童話は『おとぎばなし少年少女』（明治43年9月）に、小説は『雲のいろいろ』（明治45年5月）に、それぞれ収録された。

## 七 平塚らいてうとの出会い

いろんな意味でかわりの多かつた平塚らいてうとの晶子の出会いはどうだったのだろうか。一九〇七年（明・40）六月、成美女学校で開催されていた「閩秀文學会」（主唱者、生田長江）で晶子は講師として、らいてう（明子）は聴講生としての関係があつたが、これはいわば、集団の中での交流であつた。（そこでのらいてうの晶子の印象はのちに記す。）二人だけで対話したのは、らいてうが『青鞥』発行の準備の一つとして、晶子に「賛助員」になつてほしいと依頼しに与謝野宅を訪問した時であつた。この時の様子を晶子が訪問客の一人として書きとめている一文がある。らいてうのものちに「与謝野晶子先生の巻頭詩」（『元始、女性は太陽であつた——平塚らいてう自伝』、上巻、一九七一年八月）にその時の様子を書いてある。晶子は同時期に書いたものであり、らいてうは、記憶をたどつて何十年かあとの印象記である。当然、時差があるが、一つの記録なので紹介しておきたい。まず、晶子から。

「坂本紅蓮洞さんに頼まれてこんなことを書いて居る時に平塚明子さんが見えた。すらりとした身軀に薄地の青味を帯びた縞の袴がどんなによく似合つて見えたであらう。二十五・六の女の姿はかうでなければならぬやうにも私は思った。縞の袴などと云ふと、故人の奥村五百子女史の型のやうな人をは聯想するかも知れないが、そうではない。賤しい女が被衣かきぎを著またり、ベエルをした写真を見ることがあ

つても、似合つて見えるのは皆無であるが、この人にはきつとつり好く見えるであらう。昔そんな風をした人は町人の娘でもなければ、それより一層賤しい身分の者でもなければなかつたことは云ふまでもない。皆帯の間に守刀を差した階級の人ばかりであつたのである。守刀は差して歩かない世になつたが、明子さんなどは心に立派な懐剣を持った威厳のある女性である。

多数の女性を齒がゆく思ふであらうとこの人が云ふから、私はその通りであると云つた。割烹店の料理人に於いて、縫物師に於いて、そんなことで見ても到底男の力にあらがひ難いのは女なのであらうかと私が云つたら笑つて居た。とにかく女子の少数者に頼母しい人のあるのを私は知つて居る。」(「我家に來る客のいろいろ」、『婦人画報』明治44年7月)〔傍点引用者〕

平塚明子が、与謝野家を訪問したのは一九一一年(明・44)六月六日であつた。平塚はその日の訪問記を次のように記している。

「麹町中六番町の与謝野さんのお住居を、訪ねたときの印象も忘れられません。このときお会した与謝野さんは、四年前の閨秀文学会当時の、なりふりかまわぬ様子とはたいへんな変り方でした。萩、桔梗などの秋草模様のはでやかな俗衣がけに、そのころはやりの大前髪をくずれるにまかせたようなお姿は、むしろ個性的で異様にさえ見えました。

与謝野さんは終始下を向いたまま、けつしてわたくしの顔をまともに見ようともせず、低い声で、独り言のように関西弁で静かに話されるのです。ときには聴きとりかねることもありましたが。このとき与謝野さんは、女は駄目だということ、女は男におよばないということを繰返し話され、全国から寄せられるたくさんの歌稿を見ているけれど、やはりすぐれた作は男のものだということなどを、しきりにおっしゃるのでした。

そんなふうにと謝野さんにいわれることが、お前は女ばかりで、女だけの書く雑誌を出すとか、すばらしい女流の天才を生み出すとかいっているが、うぬぼれるな、とたしなめられているようでもあり、また反対に、だからしっかり頑張ってやれと励まされているようでもあり、どうもと謝野さんのお気持がそのときはわかりかねました。」(「と謝野晶子先生の巻頭詩」)〔傍点引用者〕。

だが、訪問後の八月七日に、誰よりも早く、「そぞろごと」(「山の動く日きたる」を含む)の詩が到着し、発起人一同、大へん喜んだことが続いて書かれている。

この二人の二つの文章を読みながら、並はずれた女性、二人の出会いが、のちのちまでいろいろ影響しあいながらも、どこか相容れない関係を結んで行ったことに思いはするのである。

前述したように、書かれた時期の隔差があるので、同次元で論ずるわけにはゆかないが、相手に対する受け取り方が、微妙に食違っていることに気付く。晶子の感じた明子の容姿については、二人の育つて来た環境の相違が、身につけているもの、そのたたずまいまでが目につくようである。「皆帯の間に守刀を差した階級の人」つまり、晶子は「武士階級」をイメージしたのである。「縞の袴」をきちんとはいている明子、それは町人の娘として育った晶子にとっては、やはり「異様」に感じたに違いない。平塚のいう「と謝野さんは終始下を向いたまま、けっして私の顔をまともに見ようとせず」とあるが、どうして、どうして、晶子は平塚の基本的なところを捉えて見ている。「心に立派な懐剣を持った威厳のある女性」などと評するあたりは的を得た観察であろう。

平塚の方はどうであったか。平塚の方には「階級」という見方がない。ありのままの美的感覚で一人の女性として見ている。「四年前の閨秀文学会当時の、なりふりかまわぬ様子」は平塚は別に次のように書いている。「ふだん着らしく着くたびれた、しわだらけの着物といい、鬘をゆわいた黒い打紐がのぞいて

垂れ下っているような不器用な髪の結び方といい、見るからにたいへんななから、無理に引っぱり出されてきたという感じでした。

笑うと独特な、深刻な皺のよる大きな顔や、首のみじかい、肩幅の広い姿形から受ける印象は、後年の与謝野先生のもっていられた雰囲気とは、まるで別人のように見えたものです。」(「閨秀文学会」というものであった。とても「気の毒でじつと見ていられないおもい」がしたとまで書いている。みじめな晶子像である。

さて、外形、風貌上の印象は、以上の通りだが、それでは二人の対話の中味はどうであったであろうか。晶子の方には、平塚の用向のことは書かれていない。共通して言えることは、女性の力のないことを語り合ったところであろう。しかし、例の取り出し方が違う。晶子の方は女性の比較の対象として、「割烹店の料理人」や「縫物師」を例に出したとあるが、平塚の方は「全国から寄せられる」歌稿の中で優れた作は男性に多いと語ったと受けとめている。事実、当時、晶子はいくつかの歌の選歌をしていたから、「歌」の例も出して話したのかも知れないが、むしろ「歌」以外の仕事人に目を向けている。平塚にとつて「料理人」や「縫物師」などには、関心がなかったかも知れないから、記憶に残らなかったのか知れない。小さい喰違いのようだが、これは、のちの二人の意見の相違点の根っこになるのではないかと推定される。

もう一つ、これも小さいことかも知れないが、平塚の文章を読んでいると、晶子の方が一方的に「女はだめだ」と語ったように受けとれる。が、晶子の文章の方には「多数の女性を齒がゆく思ふであらうところの人が云ふから」、「その通り」と答えたとある。

要するに、二人共、この点については共通認識であったのであろう。だからこそ平塚は、数カ月後、

『青鞜』の発刊にふみ切ったのであり、晶子の方は、主張して来た論をまとめて『一隅より』を発行したのである。

#### 八 第一評論集『一隅より』点描

晶子の第一評論集『一隅より』（金尾文淵堂、六二二頁、装幀・藤島武二。定価一円二〇銭）が刊行されたのは、一九一一年（明・44）七月であった。平塚らいてうらの『青鞜』が発刊される二カ月まえである。次のような短いまえがきがついている。

「近い三十四年間に書いた感想文と詩篇との中から、書肆の希望に従ひ、その一部を輯あつめたのが此の一冊です。感想文の方はもともと斯様な書物にしようと思つて書いたので無く、大抵新聞雑誌の依頼を受けて、其時時に筆を執つたのですから、多少重複した所などもあらうかと存じます。東京麹町にて、晶子。」

一九篇の評論・随筆に、一篇の詩（「雑記帳」の文中に、一九篇の小詩がべつに挿入されている）が収録されている。執筆時期は、前述したように、一九〇九年（明・42）から一九一一年（明・44）六月までのものである。内容は、評論と呼ばれるものと、随筆風と言つてよいものとが混在している。晶子は「感想文」と言っているように、まだ「評論」という文字がなじまなかつたのであろう。

初出紙誌は、『東京二六新報』をはじめとして、『女學世界』（連載）、『女子文壇』、『婦人の鑑』、『婦人画報』、『家庭』などの婦人雑誌のほか、『太陽』、『早稲田文學』、『文章世界』、『社會政策』、『學生文藝』、『精神修養』、『三田文學』など、かなり幅がひろい。ただ、本の構成上からみると、後半部分の「雑記帳」（主として『女學世界』連載のもの）は一篇として収録されているが、本文の約半分以上のスペース（三

二二頁)におよんでいる。この後の「評論集」では、たとえば、一つの新聞雑誌の文章を、二つ三つ、時には四項目にも分けて、一つ一つ主題のタイトルをつけて収録したのとは大きな違いがある。はじめての「評論集」なので、書肆の頭がまわらず、あるいは急いでの出版だったためか、わからないが、本の構成としては、よい編集と言われないものであった。

内容の特徴としてまず上げられるのは「産屋物語」、「産褥の記」、「産褥別記」など、いわゆるお産に関するものが多いことであろう。出版当時、すでに七人の子供の母親としての体験が土壌になっていることは言うまでもないが、単なる母親でないところは、「お産」を個人の問題としての感想だけではなく、たとえば「國家が大切だの、學問が何うの、戦争が何うのと申しましても、女が人間を生むと云ふ此大役に優るものは無からうと存じます。」と書き、さらに「釈迦、<sup>キリスト</sup>基督の如き聖人を初め、歴史上の碩學や英雄を無数に生んだ功績は大したものでは有りませんか。」とまで書いて、命がけの負担を果たしている「産む」女性に対して、「男の方の手で作られた經文や、道徳や、國法で」女性を劣者弱者の如く扱うことに、異議申立てをしていることである。「負」を「正」に転換させる材料として「お産」を使っているところなど、この時期としては、はじめてのことであった。

「雨の半日」、「私の宅の子供」、「日記の断片」などに見られる日常生活の描写の中には、当時の晶子の、あるいは与謝野家の様子などが、実にリアルに描かれている。たとえば「日記の断片」(一九〇九年一月)では、つぎつぎに病気になる子供たちを看病する十月一日から一〇日間の記録であるが、自宅で開いていた「講義」を夫に替ってもらったこと、当時選歌していた『女子文壇』の仕事(一日)、「都新聞の歌の清書」(三日)、「東京二六新聞」(五日)、「毎日新聞社へ歌を送る」(六日)などの記述がみられ、夜もほとんど寝られないような日常生活、ジャーナリズムとの仕事のかかわりが描かれている。このことは末の子

供が二歳になった一九一一年(明・44)にも状況は変わらない。「書きたいと思ふ事は、自分が為たいと思ふ事と共に無儘蔵である。ただ自分には暇が無い。なぜ人は眠らねばならないのか、死んでから十分に眠ればよいではないかと、睡眠時間の惜しまれる事さへある。」(「雨の半日」)

子供が多いから「自分の足は地の上に釘付けられ」る矛盾を多く感じとる。しかし「自分の目に由つて初めて見つけだす世界」がある。この新しい世界は、決して「生活」と切り離されないとこから思考がのびてくる。

「婦人と思想」、「新婦人の自覚」、「新婦人の手始」、「女子の獨立自営」などに見られる論点は、「女もまた男子と同じく人である。」という認識の上にたつて、「女子の職能を制限して結婚する事と子を生み且つ養育する事のみにある」という立論に対しての反論からはじめられる。それは、当時、啓蒙的な意味合いから創刊された数種の婦人雑誌、また、諸新聞に掲載される男性および女性の教育者などの意見に意識的に対応してゆく。文中に「流行の婦人解放とか女子の自覚」(傍点引用者)と見られるように、一種の流行現象でもあったのである。晶子はこれらを一定の教育を受けた女性の「自然の順当な推移」であるととらえている。

しかし、教育のみが万能ではない。女性に「自覚」が出てくる要因は、恋愛から自由を求めるようになる者、思想上、宗教上などから「我とは何ぞや」といった懐疑心が起こってくるとき、また、学校や家庭その他の環境で不当な束縛などに不満を感じるとき、芸術上の諸作物から、ある暗示があたえられるときとさまざまな矛盾から誘因が生れてくる。それらの精神的な自覚は、物質的保障、つまり女性の経済的自立によつてはじめて本来の「獨立自営」が成り立つという主張である。大正期に行なわれた、いわゆる「母性保護論争」時代の晶子の主張の枠組は、すでにこの時期に出来ていたのである。

## 九 同時代人の批評と問題点

同時代人の批評はそう多くない。調べた限りでは、男性の評者のみで、女性側からはなかった。新聞・雑誌の掲載中には、幾つかの雑誌が、「論」の一部を転載したり、好意的な処遇も散見できた。単行本として発行された後で、比較的早い書評は、一九一一年九月の『早稲田文學』誌上であった。

内容は、婦人雑誌上にぎわしていた「経験談」「告白物」などと比較して「その中で唯一人曲りなりにも自分の抱いて居るだけの考を、聊かの憚りもなく吐露したのは与謝野女史であつた。」（与謝野晶子著『一隅より』）、と評価し、また、在来の「道学先生」らの説法や形式的な道德や制度に対して「反抗の声を掲げて居る著者の態度には、どこか真面目な意味での先覚者と云ふ意気が見え」て頼もしい、と書きつつも、「婦人と思想」や「新婦人の自覺」などの、晶子としては、一つの主題をきめて論理的に書いたものに対しては、余り評価せず、「矢張一番読んで面白いのは『日記の断片』とか『産褥の記』とか云ふ風な理屈の交らないものの方に多い。」と書いている。

もう一つ、のちに、学習院の院長になった安倍能成「『一隅より』を讀んで」（『東京朝日新聞』、明治四四年十月三日）、がある。安倍は、この本を半分位まで讀んだところで「この本の中には良人の鉄幹氏の書いた者も交はつて居るといふことを聞いた時は非常に不快を覺いて殆ど批評を止めやうかと思つた」と冒頭部分で書き、「仕方がないから、一讀の所感を陳べることにする。」といやいやながら書くことを述べている。聞いた話の具体性は少しも書かれていない。「みだれ髪時代などには世間から危険な女の様にも見られて居たが、その根本思想は常識に基いた頗る穩健な者であつて、空想的でも革命的でもない。」と「常識」の枠をはめ、晶子は、思想家ではなく、實際問題の処理者であり、「耳學問の淺薄」さがあり、「何だか自分の周囲の人ばかり見た眼で、廣く世間を判断しようといふ狭く主観的な女性の歎點」が見え

る、とかなり意地の悪い文章がならぶ。晶子が、男女の対等な関係を求めつつも、現段階では、女性ももう少し「自己教育を心がけ」ねばならないという論に対しては「正大な意見である。自分は全然これに賛成する。」と妙なところで賛成する。最後の部分で再び「唯世評の眞否は知らぬが、よし夫人の意見が眞違つて居てもどうでもよいから、良人の考へを受継ぐ様のことなく、何でも独自の考へを発表してもらひたい。」でしめくくられている。「どうでもよいから」とは、どういう意味であろうか。思わず「失礼な」と言いたくなる。全体、ゴチャゴチャした文章であり、最後まで、良人の代筆を強調して印象づけている。

一読、すぐに一つの文章が浮かんだ。らいてうの一文である。「噂の眞偽については知りませんが、あのころ与謝野さんが、雑誌『太陽』に書かれたものの中には、夫君寛さんの筆になるものもあるという、世間の評判を耳にしたこともありました。」（「与謝野晶子さんとわたくし」）。「母性保護論争」時期のことである。大正期になれば、押しも押されぬ「社会評論家の晶子」と遇されていた時である。大正期に至っても、こうした「噂」がとりざたされていたのであろうか。晶子を「歌人」の世界にのみ、とじ込めようとする言説が「論争」時にもまま見られたが、これは人間の多様な活動を認めようとする狭量な思想であり、女性蔑視の思想であると言わなければならない。

漱石個人ではないが、漱石グループと与謝野夫妻は、『東京朝日新聞』をめぐる側面、対立関係のあったことは事実であり、その側、あるいは、晶子の言論活動の拡大に好意的でない側には、そうした「噂」—— 確証も反証もしょうがない、極めて悪質の噂—— が、広く流布していたことをうかがわせる。

晶子の文筆活動は、こうした「噂」にも抗して拡大して行ったと言つてよい。